

## 儀礼的行為と教育文化

—熊本県上天草市松島町の盆儀礼における「間」に着目して—

舛本 佳菜江

### はじめに

本研究では、歴史人類学的手法を用いて、「儀礼的行為」と「教育文化」<sup>1</sup>との関係を明らかにすることを目的とする。儀礼は、古来より社会集団の形成や秩序の維持のなかで次世代の育成に関わってきた。従来の民俗学においては儀礼研究の多くの蓄積をみることができる<sup>2</sup>。しかし、これまでの儀礼研究において示されるのは、儀礼によってささげられる物に何があるかという羅列的な記述や物の象徴的な意味の記述が中心であった。これに対して、身体を介して儀礼がどのように行われ、そうした儀礼がいかにして継承されていくのかに光を当ててきたのが、1980年代からベルリン自由大学のクリストフ・ヴルフ（Christoph Wulf）を中心に展開されてきた歴史人類学である。歴史人類学とは、抽象的な学問の規範を基礎に置き、人間の営みの現象や構造について人文社会科学をはじめとする人間諸科学の所産を踏まえて、西洋中心の近代科学の枠組みを乗り越えていく視座を獲得しようとする立場である。それは、近代的な諸学問における閉鎖性を乗り越えようという問題意識に支えられている。その内容は、精神、身体、感情、美的なもの、宗教、儀礼、パフォーマンスなど、これまで研究の俎上にあまりのせられてこなかったものを対象としている<sup>3</sup>。

さらに、儀礼とは言葉に還元できない行為である。儀礼には、通過儀礼を含めて成人式や結婚式など人生の節目に関わる儀礼や年中行事に関わる儀礼、学校の卒業などの制度に関わる儀礼がある。儀礼的行為とは、日常における振る舞いとは異なる形式的な行為であり、空間の中で集団によって遂行されるなかで、さまざまな感情を引き起こす。この感情そのものによって行為自体が変化するのである。また、儀礼は演技的性格（*szenischen Charakter*）を持ち、そこで身体的な表現は演技的行為（*szenische Verhalten*）といえる<sup>4</sup>。

これまでの歴史人類学的手法による儀礼研究には、鈴木晶子・ヴルフらの日独幸福感比較研究<sup>5</sup>や岡部美香らによる日韓比較研究<sup>6</sup>や高松みどりのチャレ儀礼のパフォーマンス研究<sup>7</sup>等がある。これらの研究では、定型化されて伝えられる儀礼や儀式を手がかりとしつつも、地域や学校、家庭における相互行為にみる演技的行為や儀礼的なものないし儀礼的な行為に注目している。さらに、こうした儀礼研究において死者と生者との関係性が注目されてきた。本研究では、こうした問題関心を引き継ぎ、日本における盆儀礼を対象とする。

盆は、他界から祖霊をはじめさまざまな死霊が現世を訪れるといわれる。この時期、多くの人が故郷に帰省し祖霊を迎える。盆の期間は多くの地域で仏壇とは別に盆棚が作られ、そこに多くの食べ物を並べて祖先の供養をする。餓鬼棚や無縁仏のための棚を設ける地域もある。こ

のように、各家では盆棚を作って祖霊を祭る。そして、寺院でも本格的な収穫期に入るこれからの時期にあの世から訪れた死霊が災厄を齎さないように施餓鬼会を行う<sup>8</sup>。現在の日本の盆は日本古来の祖先の霊を祭る行事に、仏教由来の盂蘭盆会が合わさったものといえる<sup>9</sup>。民俗学者の新谷尚紀は、これまで梵語で「倒懸」を意味する「ullambana」が「盂蘭盆」の語源とされてきたことに対して、西晋の竺法護訳と伝えられる『仏説盂蘭盆経』ですでに「盂蘭盆」の「盆」が器物であることが自明のこととして叙述されていることから、盆儀礼が死霊への飲食の施しの行事であった可能性を指摘している<sup>10</sup>。こうした飲食を施すといった行為に注目していくことが、歴史人類学による盆儀礼へのアプローチの手がかりとなる。

さらに、本研究の調査の対象地は、熊本県上天草市松島町合津である。上天草市は大矢野島と上島を含む天草諸島の東部に位置する。天草では、戦国時代末期のキリスト教伝来後、多くのキリシタンが生まれた。16世紀末に伴天連追放令が発布されたが、キリシタンは増え続けた。しかし、17世紀初頭に江戸幕府が禁教令を発布し、キリシタンの本格的な迫害が始まった。1637年の天草・島原の乱の後、天草は幕府直轄領となり、初代代官鈴木重成が兄の正三ら禅僧を天草に招聘し、神社仏閣を再建・創建し、天草の民は仏教に帰依した<sup>11</sup>。こうした歴史的背景により、現代ではキリスト教について語られることの多い天草であるが、鈴木治政下に拡大した仏教信仰は天草の住民に引き継がれており、今回取り上げる上天草市松島町にも多くの仏教徒が存在する。ゆえに、盆儀礼もまた天草の多くの人々の生活の中に根づいている。

以上より、本研究は、熊本県上天草市松島町における盆儀礼の「儀礼的行為」に注目し、何がどのように行われ、どのような変更を加えながら受け継がれているのか、を主な課題とする。その際、オギュスタン・ベルク (Augustin Berque) が時間と空間の次元を併せ持つものとして着目した「間」という分析概念を用いる。後述の通り、「間」とは、それ自体として「存在する」ものではなく、ひとや物を「内包する」舞台となる。つまり、「間」という概念は、盆儀礼を、定型化した物自体を伴う儀礼としてではなく、物（墓、縁側、赤飯等）を舞台とする人々の行為として捉え、それが創出する「教育文化」への洞察を可能にする。同時に、その洞察において、歴史人類学における重要な分析概念の一つとして「間」の可能性を見出すことになるだろう。

## 第1章 熊本県上天草市松島町の盆儀礼

調査は、熊本県上天草市松島町合津のX地区にあるA家とB家を対象に、A家は2013年と2014年、B家は2013年に行った。盆儀礼の参与観察にあたってはビデオとカメラを使用し分析に利用した。また、聞き取り調査の際はボイスレコーダーを用いた。A家は、当時80代の夫婦二人と長男家族で暮らしている。B家は、80代の女性が一人で暮らしている。また、2013年の調査は、A家とB家の儀礼の時間がずれたために両家の資料を取得することができた。A家の盆儀礼にはB家とは異なる点や変更された点などを観ることができるという意味で貴重な調査であるといえる。従って、本研究ではこのA家の資料を中心にし、B家の資料を比較対象として用いることにする。

### 第1節 A家の盆行事（2013年、2014年）

A家の調査期間は、2013年の8月12日から8月15日と2014年の8月13日から8月15日

## 舛本：儀礼的行為と教育文化

である。今回用いる A 家の資料は、B 家とは異なる点や変更された点などを観ることができる。A 家は、木造二間続きの和室と広い縁側を持つ家に、夫婦二人で暮らしており、同じ敷地内に長男家族が暮らしている。夫婦は畑で野菜作りを行っているが、2014 年には 2013 年の調査時よりも老齢による体のつらさが目立つようになってきていた。そのため、長男夫婦に少しでも畑仕事を教えようとする様子がうかがえた。普段はこの畑で作った野菜を料理の材料の足しにしており、長男の嫁がその野菜を使った料理等を差し入れるかたちで生活している。また、夫婦の内でも特に妻は仏教への信仰心が篤く、御詠歌を習うために寺に出向くなどして、住職から仏教の教えを積極的に学ぼうとしてきた。そのため、本研究における調査でも盆儀礼にその影響をみることができる。

A 家の盆儀礼では、墓掃除は、8 月の盆前の 12 日までに行う。2013 年は僧の読経も 12 日の盆前に行われた。A 家では盆棚の準備を 12 日に行っている。盆棚の準備は妻が行っており、仏壇や位牌を掃除したあと、盆棚が準備されていった。仏壇の前に設置したテーブルに花柄の煌びやかな敷物をかけ、テーブルと敷物の間に空箱を差し込んで二段にする。そして上の段に位牌と観音像を置き、下の段にロウソク、線香立て、線香、マッチ、鈴、過去帳、般若心経と並べられていく。最後に湯呑茶碗を洗って水を供え、下段の端に花を供えて盆棚の準備は終わりである。この後、妻は床の間を丁寧に掃除して 12 日の準備を終えた。

13 日は真丸く丸めた団子である迎えダゴを供え、夕方に夫婦の長男夫婦（O 夫婦）、里帰りした孫やひ孫たちで墓に向かう。その時子どもたちに提灯を持って縁側から出かけさせる。墓に到着すると線香の束に火をつけ、墓に手を合わせる。墓に到着してから手を合わせるまでの間、ひ孫の Y に対して「Y も死んだらここに<sup>入るんだよ</sup>と声をかけ、Y が肩をすくめる姿を見て笑っていた。Y 自身も驚いた様子ではあったが、笑顔で気恥ずかしそうな表情を見せ、怯えているようには見えなかった。また、墓に刻まれた名前に興味を持った Y とその祖父の長男 O のやり取りでは、Y が「ねえ天草じいじ、ここに<sup>入るの</sup>と聞くと「うん。じいじが先<sup>入って</sup>から Y も後でおいで」と O が返し、それに対して Y が「そしたら O（長男の名前）って書いてあるかな」と返す場面があった。手を合わせると、提灯に火をつけて「<sup>行くばな</sup>あ」と祖霊に声をかけ家に連れて戻った。この時、A 家では供養する者がなくなった隣の墓も同時に供養し、A 家に迎え入れている。家に戻ると中には縁側から入り、提灯の火をロウソクに移し再び手を合わせた。

14 日は曹洞宗の A 家では一日三回膳を供えた。また 14 日は合津の初盆参りの日である。A 家では夫婦が二軒、長男夫婦が一軒、別の地区の知り合いに初盆の家があったので初盆参りに出かけた。この地域では初盆の家に親類から提灯を贈る風習があり、三軒とも美しい堤灯で盆棚のまわりが彩られていた。訪問客は、初盆の家の盆棚に手を合わせると用意された料理を世間話などをしながら食べていた。この地域では初盆を迎えた家の墓の上に、複数の提灯を使い三角の屋根のように提灯を吊り下げる。さらに、訪問した初盆の家では墓から家に向かう道の角々に提灯が置かれている様子が見られた。

15 日は朝昼夕と膳を供えた他、昼に他家から赤飯が差し入れられ、盆棚に供えられた。合津には盆に赤飯を供える習わしがあるのだが、この年 A 家では作られなかったのも、それを知った人が赤飯を差し入れたのである。そして、夕膳の後に長丸い形の団子である送りダゴを供え

た。この長丸い形には死者が土産に持って帰るのに持ちやすいようにという意味がある。夜になるとロウソクに火を灯して手を合わせた後、提灯にロウソクの火を移して縁側から家の外へ出る。A家では、この時、施餓鬼供養の卒塔婆を持ち、無縁仏のために水の子を道に蒔きながら墓へ向かう。墓に着くと、墓石の横に重ねてある前年までの卒塔婆の上に新しい卒塔婆を重ねて置いた。そして、線香に火をつけて手を合わせた後、堤灯を墓に残して家に戻る。家に戻ると玄関から入り、再び盆棚の前で手を合わせて2013年の盆は締めくくられた。

2014年の盆儀礼では、墓掃除と盆棚の準備は12日までに済ませられた。13日はまだ明るい時間帯に真丸い迎えダゴを供え、雨が降りそうな雲行きをみて例年より早い16時に堤灯と線香を持って主人と孫が墓へ向かった。この年は長男夫婦が親戚の初盆の手伝いに出かけており、この日は高齢の夫婦が迎えに出かけなければならなかった。しかし、主人の妻は体が弱ってきており、主人が孫とともに墓へ向かった。その時、主人は足腰が弱ってきているため、墓のすぐ近くまで車に乗って出かけた。墓に着くと線香に火をつけて手を合わせた。そして、普段ならここで堤灯に火をつけるが、今年は明るいいため堤灯の火はいらないだろうと判断し「帰るばなあ」と祖霊に声をかけて家へ戻った。再び車に乗って家に戻り、今度は縁側から家に入って盆棚のロウソクに火をつけて手を合わせた。

曹洞宗のA家では、毎年8月14日に一日三回膳が供えられている。しかし、この年は、妻が昼膳を用意しておらず、次は夜に出そうとしていた。しかし、そこに長男の嫁が現れ「お昼これでよかるか」と昼膳を妻に見せにきたので、妻は「あ、作ってくれた」と安心した様子を見せた。その後、妻は隣の家が初盆を迎えたので初盆参りに出かけた。

8月15日も朝、昼、夕と膳が供えられた。この日は昼ごろから赤飯作りが始まり、夕膳には赤飯が供えられ、夜には長丸い送りダゴが供えられた。その後、盆棚の線香に火をつけて手を合わせ、ロウソクの火を堤灯に移して縁側から長男夫婦と孫、ひ孫、親戚が墓へ向かう。この時前年に引き続き施餓鬼供養の卒塔婆を持ち、水の子を蒔きながら墓へ向かっていた。そして、墓ではひ孫のYに「Yも死んだらここに<sup>入るんだよ</sup>」と大人たちが声をかけると、Yは何と答えればよいのかわからないというように照れ笑いしながら肩をすくめ、大人たちもそれを見て笑っていた。墓では線香に火をつけ、皆で手を合わせる。そして提灯を墓に残したまま家へ戻り、今度は玄関から入り、再び盆棚に向かって手を合わせ、2014年の盆は締めくくられた。

## 第2節 B家の盆行事(2013年)

B家の調査期間は、2013年8月13日午後から15日夕方までの3日間である<sup>12)</sup>。B家は木造、2間続きの和室と広い縁側を持つ間取りである。この家は調査当時54、5年前に改築されており、その際作り付けた木製の仏壇を大切に使いつづけている。また、一年中玄関にしめ縄を飾る天草独特の風習がみられる。B家は八十一歳のH(女性)が一人で暮らしている。以前は寺との縁も深く、Hの父親が存命の頃は曹洞宗の檀家としてX地区の総代を務めていた。現在は総代を務めていないが、夜は般若心経を写経し、朝は般若心経を読み上げて仏壇へ供えるという信仰心の篤い生活を送っている。B家の盆儀礼では毎年7月7日に墓掃除を行っているが、2013年は用事のために7月6日に墓掃除を行った。また、2013年はA家とB家のあるX地区では僧の読経が盆前の12日に行われていた。ただし、Hによれば、例年は13日に行っているということである。

## 舛本：儀礼的行為と教育文化

8月13日は、昼に宇土から長男家族（長男、孫、ひ孫のK）が到着するのを待って、14時30分から盆棚の準備を始めた。位牌をきれいに掃除し、花や果物などとともに仏壇の前に組み立てた盆棚に移す。盆棚は、仏壇とは別の段状のものであり、仏壇の前に設置される。その上に美しい敷物を被せて、位牌や供えものを置いていく。最上段には四つの位牌がのせられた。続けて、上から二段目にはスイカと葡萄が、その両端には花が供えられた。上から三段目は一日三回膳を供える場所である。最後に、盆棚の前に仏具を置いた小机を置き、飾り忘れていた灯籠を膳を置く段の両端に長男が立てて準備を終えた。飾り付けを終えると真丸い迎えダゴ（団子）を作り供えた。そして、四つの位牌の下に蓮の葉を敷いた。B家では位牌を置くために蓮の葉を用いているが、最近では手に入らない時もあるとHは述べていた。この日使った蓮の葉も、当日の朝にやっと店で買ったものである。16時45分に迎えに出かける準備を始めた。提灯を持って出て、Hと長男と孫、ひ孫のKの四人で墓に向かう。墓に到着すると手を合わせ、提灯に火を灯して先祖を家に連れて帰る。途中、人とすれ違うとKは元気に挨拶し、知らない人とも怖がらずにコミュニケーションをとる。そして、家に戻ると縁側から家に入り、墓で灯した提灯の火を小机のロウソクに移して、再び手を合わせた。

14日は、曹洞宗の家では一日三回膳を供える決まりであり、Hもそれに従っていた。膳の内容に特別な決まりは無いが、工夫をこらした膳が並ぶ。また、14日は合津の初盆参りの日である。Hの住むX地区では、この年死者がいなかったため、Hがこの日初盆参りに出かけることはなかった。

最後の15日も一日三膳供える。この日は朝から赤飯、にしめ、味噌汁を供えた。そして、昼、夜と膳を供えた後、最後に長丸い送りダゴを供えた。送りダゴを供えてしばらく時間を置くと、仏壇に手を合わせてロウソクの火を提灯に移す。そして、主人は家族に提灯を持って縁側から出かせ、一緒に墓まで先祖を送る。墓に手を合わせた後は提灯を墓に残して家へ戻り、玄関から家に入り、B家の2013年の盆は締めくくられた。

### 第3節 A家とB家の盆儀礼の通時的变化

本節では、現代におけるA家とB家の盆儀礼を『松島町史』の記述と比較し、合津の盆儀礼の通時的变化を明らかにする。『松島町史』には、旧暦の盆行事が歴史的な観点から捉えられており、本調査の参照軸となる。『松島町史』にまとめられた当地の盆儀礼の伝統とその変化を上記の盆の調査と比較するならば、A家とB家はともに真丸い迎えダゴと長丸い送りダゴを供えること、提灯を持って墓に出かけ縁側から家に入るものが共通しており、これらは以前から変更が無い点であったといえる。これに対して、以下は変更があった点である。

まず、盆の日程について、『松島町史』によれば以前は旧暦の7月13日から15日に行われていたとあるが、現在は新暦の8月13日から15日に行われている。また、旧暦の頃の墓掃除は、旧暦の7月7日に行われていたとある。他方、A家は新暦の8月12日までに墓掃除を行っている。また、B家では旧暦の頃の日取りを受け継ぎ新暦の7月7日に墓掃除を行っている。

次に盆棚の準備については、『松島町史』によれば、以前は旧暦7月13日の午前中に盆棚を準備していたが、新暦の現在では、A家では8月12日、B家では8月13日の午後から盆棚を準備していた。A家は12日までに墓掃除を済ませるだけでなく、全ての準備をして盆期間を迎えていた。さらに、『松島町史』では、昔の人が盆を迎えるにあたって米を搗いたり盆中の牛馬



の飼葉をあらかじめ刈り込んだりと盆期間中に先祖を心置きなく先祖を祭る期間としたことが述べられている<sup>13</sup>。A家の盆棚の準備の日付は、この盆前の準備の内に盆棚の準備が含まれるようになったと考えられる。また、B家の盆で盆棚の一番上の段の位牌の下に蓮の葉が敷かれていたことは『松島町史』の記述と一致する。しかし、『松島町史』には蓮の葉の入手方法についての記述はない。X地区での聞き取り調査では、以前は池に蓮の葉があるところからもらうなどしていたが、B家の調査では買うことで手に入るものとなっていた。また、A家では蓮の葉は敷かれていなかった。

迎えに出かける時に縁側から出るという行為は、『松島町史』には13日に墓に向かう時に「小さな提灯を持って家の縁から皆出る」<sup>14</sup>とある。A家の2013年では、子どもたちに提灯を持って縁側から出かせせる様子がみられた。さらに、家に入る際には、先祖を墓から連れて帰って来た時が大切だという考えがあるので、墓から戻ってきた時にはA家もB家も縁側から入っていた。また、A家の2014年では、主人が高齢のために車で墓に出かけたことや妻が昼膳を作らなかったものの、嫁が準備したことで安心した様子がみられた。このことから、社会の移り変わりの他に、作りたいが作れないという老化のための儀礼遂行の困難さがうかがえる。

初盆参りについては、『松島町史』では、14日までに行けば良いことになっていたが、現在では14日に初盆参りが行われており、A家においてその様子が観察できた。

その他、合津の盆では15日の夕方に赤飯を供えることが『松島町史』の記述にある<sup>15</sup>。A家においては毎年供えているわけではなく省略される傾向にあり、B家においては朝供えるように変更されている。この赤飯については次章第3節において詳述する。また、A家が行っている施餓鬼供養と水の子を蒔きながら墓へ向かう行為については、『松島町史』の盆の記述にも、B家の盆行事にも見ることができなかった。

総じて、本調査におけるA家とB家の盆儀礼は、『松島町史』の記述と比較しても、少なからぬ変容を遂げてきたことがうかがえる。そうした変容後の行為が持つ意味は、次章の検討に譲りたい。

## 第2章 生活のなかの間隙—盆儀礼における「間」

### 第1節 死者と生者が共にある「間」—墓

本章では、以上の調査を踏まえて、盆儀礼における「間」について考察する。オギユスタン・ベルクによれば、「間」とは「意味をになった間隔の設置」であり、また「間」はそれが内包するものであり、かつそれ自体は存在しないものであること、その他「主体と他者の間の十全なコミュニケーション〔中略〕の場」である<sup>16</sup>。それゆえ、「間」とは、時間や空間を隔てるものであると同時に、それによって隔てられた先行世代と次世代や死者と生者、あるいは（血縁や地縁等における）内と外とを取り持つものでもある。「間」に注目することは、盆儀礼における人々の教育文化の創出過程を捉えるための重要な視座の一つといえるだろう。

まず、A家の盆儀礼の遂行過程においてみられた、墓という「間」＝空間における大人と子どもの死をめぐるやり取りを考察する。A家において、墓で大人たちが子どもに「死んだらここに入るんだよとよ」と声をかける場面が2年続けて行われていたことは印象的である。この瞬間に子どもは少し怖いという感情を抱きつつも、死というものに触れることになる。

しかし、Yの「天草じいじ、ここ（墓）に入ると」や「そしたらO（長男の名前）って書いてあるかな」といった発言からは、死んだら墓に入ることや墓に名前が刻まれることを、祖父の存在を通して理解しようとする姿をみることができる。これは、Yにとってまだ死や死者というものが現実味を帯びていない状況にあるため、まだ生きている年長の他者を通して死を理解しようとしているのだと考えられる。また、祖父のOが孫のYに「じいじが先入ってくけんYも後でおいで」と応える場面は、自分が死ぬということがまだ想像しづらい年齢のYにとって、自分もOの後にこの墓に入るということを理解しつつ、いずれ訪れる死というものを受け入れていく手助けとなっているのではないだろうか。

さらに、墓から祖霊を家に連れて戻るとき、「行くばなあ」と声をかけたり、提灯に火をつけないと判断したりする場面は、A家の人たちにとって死者がそこにいるものとして、そして生者と同じようにみている言動といえる。これら声かけや判断は、死者がまるでそこにいるように扱っているからこそ起こることなのだと考えられる。このように、墓という「間」において、A家の人たちは、弔われた死者をまるでそこにいる生者として扱うように振舞っている。そして、こうした空間に設えられた大人とのやり取りで死を意識するような経験が、子どもをいつかは訪れる死についての学びに導くのではないだろうか。

## 第2節 「縁」と「間」が取り持つ盆儀礼—縁側

ベルクは、「間」に関わって「縁」という概念にも着目し、それを「縁」の観念として掘り下げて、「縁の機能は、Aというもの（具象物、非具象物）の、Aでないもの（Bとしよう）との接触を仲立ちすること」であり、Aに参加しているがAではなく、Bに参加しているがBではない、AにもBにも関係する第3の媒介項であると述べる<sup>17</sup>。こうした「縁」の解釈によって、盆儀礼において縁側を通るということの意味を問うこともできるだろう。

すなわち、盆儀礼において死者が生者とともに過ごすことを可能にする、死者の世界から生者の世界への入り口のようなものとして、縁側の存在が注目される。ここではまず、縁側がどのようなものとして語られているのかについて確認しておく必要がある。東孝光は、縁側のことを「内部でもなく外部でもない、むしろその両方にまたがって二つを結びつけるさまざまな空間装置の場」と述べている<sup>18</sup>。つまり、縁側は家の内と外のどちらでもない、両者を結び付ける場であると述べているのであり、ベルクの「縁」の考えとも重なる。この内でも外でもない空間が合津の盆儀礼における祖霊の家への入り口となっていることは、注目に値する。この縁側が墓に向かって作られているA家とB家の家の構造は非常に興味深く、調査を行った家と墓の位置関係について明らかにしておきたい。

今回調査対象となったX地区では、地区全体に対して南の方向に墓を見る位置関係にある。そして、A家は南向きに、B家は東向きに縁側を備え、空間的配置をみる限り墓の方向を向くかたちで縁側が備え付けられているように見える。他に、同じ地区の聞き取り調査の際に確認できた2軒も、ともに南向きに墓の方向を向くように縁側が備え付けられていた。もとより、葬式の出棺時に死者を縁側から出すことは多くの地域で行われているが、合津では葬式の時だけでなく、盆儀礼でも墓から先祖を連れ帰った時と墓に連れて戻るときに縁側から出入りする。

磯崎新は、「間」について考える際、「はし」という概念を持ち出している。つまり、「はし」という言葉には、「端、橋、箸、階、嘴」などの意味があり、二つのものの「間」をかけた

ことを意味した。「端」は世界の端部であり、その対岸には別の世界が存在すると予想されており、此岸と彼岸、現世と他界、上段と下段といった二つに区分された世界の間を横断したり連結したりするものなどが「はし」という言葉で呼ばれた。縁側もまた建物の「端」であり、「橋」や「梯」と同音である。「橋」は川の両端をつなぎ、「梯」は高さの違う床をつなぐといういずれも異なった空間を結び付けるものである。端部が「はし」と呼ばれるのは、上述したように二つの世界を横断したり連結したりする「橋」の役割を持つとともに、端部が異なった二つの空間の境界を形作っているためである。この境界において、現世と他界という二つの空間が出会い、想像と現実の世界が対置されることになる。そして、「人間はその現実に住むが、霊魂は想像の世界にあつまり、現実の世界の人間たちを訪れるのである」<sup>19</sup>。これを踏まえるならば、合津の人々が盆儀礼において祖霊を連れてきているという振る舞いをする時に縁側から出入りするものは、縁側が他界と現世という二つの空間の会合場所だからとすることができる。縁側は他界と現世の「縁」を結ぶ場なのである。

さらに、盆儀礼において儀礼遂行の中心的な場所となる和室に注目する。盆儀礼の時は、縁側を通して和室に入り、仏壇とは別に設置した盆棚で祖霊を供養する。ここでは、膳や果物や団子など食事による供養が行われる。生者は床の間のある和室に客を迎え入れてもてなすが、盆儀礼においてはその対象が祖霊となる。その際に、死者に対するもてなしにあたる供養の道具の一つが盆棚である。しかし、供養において重要なものは盆棚だけではない。それは、客をもてなすときに茶菓のみならず空間の演出が大切とされるように、仏壇のある部屋に祖霊を招き入れた時には、盆棚に果物や膳を供えるだけでなく、祖霊を迎え入れる和室や床の間等の空間もまた重んじられるからである。

再びベルクの議論を参照すれば、『床の間』は、非言語的コミュニケーションの重要性を建築レベルで示すものである。すなわち、床の間の装飾が夫婦のコミュニケーションをよりスムーズにすると同時に客と主人が床の間の飾りについて何気ない会話をするのが、肝心な話をする前の仲立ちの役目を果たしてくれるのである<sup>20</sup>。床の間が人と人の「間」を取り持ち、仲立ちとしての「縁」の役割を果たすということである。それでは、この客を死者と想定した時、何が見えてくるだろうか。

『松島町史』には床の間に関わる地域の一般的な盆儀礼の記述はない。しかし、2013年の盆儀礼の事例に戻ると、A家の妻は盆棚を準備した後に床の間を丁寧に掃除し、B家では床の間の掃除はしていないが、調査者に対して一つ一つ床の間飾りを丁寧に説明していた。両家は床の間を大切にしており、特にA家の妻の床の間の掃除は、死者を生者のようにもてなしているとも受け取れる。このように、盆儀礼を行う和室には仏壇に加え床の間があることから、盆儀礼と床の間の関係についても考えていく必要があるのではないだろうか。

### 第3節 死者と生者を切り離し取り結ぶ「間」—赤飯

和室の盆棚に供えられるのが赤飯であるが、これもまた仲立ち（縁）という役割を持つといえる。もとより、合津地域の盆の他にも盆に赤飯を作る地域について、たとえば、秋田県の盆で赤飯を作ることが指摘されている<sup>21</sup>。合津地域の赤飯は、『松島町史』では赤飯を供えるのは8月15日の夕方とされる<sup>22</sup>。しかし、2013年と2014年に行った聞き取り調査ではB家の事例にみられるように、朝から供えるという家が多く、夕方に供えるという話を聞くことはで



きなかった。また、A家とB家のあるX地区での聞き取りでは、赤飯を供えるという家が多数存在したが、聞き取りをした他の地区（Y地区）では1軒も聞くことができなかった。また、X地区においても、以前は赤飯を作っていたが現在は作っていないという家もある。

これには、先行世代の死によって赤飯を作るという義務感から解放された例や、老いて全ての儀礼的行為を行うことが難しくなったこと等の理由が考えられる。また、板橋春夫は、地域によっては赤飯から饅頭へと変化していることを指摘しているが<sup>23</sup>、Y地区での聞き取り調査でも「お盆は赤飯はしないかなあ、饅頭かなあ」という発言があり、この地域でもともと赤飯が作られていたとするならば、それが饅頭へと変化したということも考えられる。

合津の中でも盆に赤飯を供える儀礼があるX地区の人たちは、赤飯を供える意味について「（理由は）聞いていないがきかんかったばってん、昔から、15日には赤飯するてずうっと言い伝えだ」、すなわち、＜理由はわからない＞が続けてきたと述べる。しかし、赤飯の儀礼が現在にも過去にも存在しないかもしれない地域では、＜赤飯は祝いもの＞だからつくらないという反応が返ってくる。もし合津の盆の赤飯が祝いものならば、先祖が帰ってくるのを祝うためなど、それ相応の意味から＜祝いのため＞と伝わっていてもおかしくない。従って、赤飯が作られる＜理由はわからない＞という状況は、赤飯が作られる理由に祝いとは別の意味があった可能性を提示する。

管見の限り、盆における赤飯についての記述はほとんどないが、葬儀では赤飯を作るという行為が行われてきた。板橋春夫は、赤飯を葬儀に使用する意味について葬儀もハレだったと述べたうえで柳田の説に注目し、赤飯がハレの食べ物なのであれば赤という色彩に重要な意味があったと述べる。この柳田の説とは、赤い色が物忌みの生活に入る日ともとの生活に戻る日の境目を意識させようとするというものである<sup>24</sup>。この柳田説を合津の盆に当てはめてみるならば、もともと15日の夕方に供えられていた赤飯には物忌みの生活からもとの生活に戻るといふ、死者と生者とを隔てる境目の意味があったと考えることができる。そして現在は、その境目の意味が失われたため朝から供えられるようになったと考えることができる。

さらに板橋は、柳田がある座談会において赤飯を「葬式法事の終りに炊く」<sup>25</sup>と発言していることを踏まえ、「柳田は葬儀における赤飯の存在を承知し、葬儀に赤飯を使用するのは心の持ち方を変えるためであると語っている」ことに注目している<sup>26</sup>。ここでは、幸も不幸も関係なく儀式の際に赤飯が用いられており、それが心持ちを変えるために使われていたことがわかる。

それでは、死の儀式に注目する際、「赤いごぜん」、たとえば赤飯を供えることによって物忌みの境目を区切り心の持ち方を変える儀礼の意味について、どのように考えればよいか。トーマス・マホー（Thomas Macho）によれば、死の儀式について、先祖がこの世に帰ってくる期間は一定の期限付きであり、そのとき先祖は文化的伝統の証人であり、守護者でもある。また、埋葬や服喪規制を遵守する限り死者が生者の国の境界を勝手に越えることはない<sup>27</sup>。こうした解釈には、死者はこの世のどこかに存在していると捉え、死者と生者の空間は往来可能なものであるという考えがある。その場合、守護者である祖先が一定期間期限付きで子孫のもとへ帰ってくることによって、文化的伝統が守られ、死者は生者の世界にかつてに踏み込めなくなる。

これを踏まえると、赤い色が物忌みの生活に入る日ともとの生活に戻る日の境目を意識させるものだとする柳田説は、赤い色で時間的に物忌み日の前後を区切るだけでなく、死者と生者の世界の境目を結界のように空間的に分ける意味があったと考えられないだろうか。すなわち、

合津において盆儀礼の最後に赤飯を作り供える儀礼的行為は、往来可能な生者と死者の空間を分かち切断の技法であり、さらに盆儀礼を遂行し祖先を迎えている期間は、生者と死者の世界の境目がなくなり往来可能となる期間といえる。つまり、盆儀礼における赤飯を供える行為は、死者が生者の国に入り込んでくることへの恐れのために作られた儀礼であるとも考えられ、合津の盆は祖先を尊敬する気持ちだけでなく、祖先を含めた全ての死者に対する恐れ念の現れであるといえるのではないだろうか。

さらに、赤飯を供えるということは盆期間の終了を祖霊に伝える儀礼でもあるといえる。それは、主人が客人に「もうそろそろ帰るお時間ですよ」と伝えるようなものである。しかし、ベルクによれば日本人は言葉の投げ合いによる意志伝達を好まない傾向にある。この日本人の性質に対してベルクは「二人の人間を直接接触させる対話を忌避する形での、「縁」の現われ」<sup>28</sup>に注目している。すなわち、祖霊に対して直接的に帰るようには伝えにくいところを、赤飯という媒介物によって帰る時が来たことを暗に示していると考えられることができる。この場合、赤飯は仲立ち（縁）の役割を果たすことになる。つまり、この赤飯の仲立ちによって生者と死者の「間」が取り持たれる。まさに、赤飯を供える儀礼は、一年に一度の盆期間の終わりを知らせ生者と死者との間を切り離すとともに、死者と生者との関係を取り持ちつなげる役割を持つのである。

## おわりに

本研究では、熊本県上天草市松島町の盆儀礼を対象として、歴史人類学的な視点から探究を進め、盆儀礼における「間」あるいは「縁」という概念への思考に辿りついた。最後に、日本において「間」というものがいかに大切にされているのかを確認しておきたい。

磯崎新は、高階秀爾らとの対談において、日本人にとっての「間」の重要性について建築を例として次のように述べる。建築における「間」は、柱と柱が立っている隙間であると述べ、ヨーロッパ建築と日本建築を比較する。日本建築における「間」は、これを「けん」と呼び、堂の正面に立つ四本の柱の間の三つの間を「三間（さんげん）」と呼ぶ。大工は、三間と奥行きが二間のことを「三間二間」と呼ぶ。つまり、日本建築にとって重要なことは柱よりも、「間」である。一方、ヨーロッパ建築は、柱と柱の間の隙間を柱の太さの一・三倍、一・五倍といった具合に柱を主にして考えており、「間」は従の立場にある。したがって、ヨーロッパ人にとって頼りにならない隙間が日本人にとっては重要なものとされる。また、「何もない場所が一つの聖なるものと呼び寄せる場のための設定となる」ため、「齋場」と呼ばれる祭儀の場の存在が注目される。たとえば、紫宸殿の前の砂浜や伊勢神宮の境内を白い石で埋めたもののように、周りのもうもうとした木立の中を神聖な祭儀のために真っ白に切り取られた場が日本には最初からあったのである<sup>29</sup>。

このように特別な場が設えられるという日本の祭儀のあり方について考えると、合津の盆儀礼においても、和室が上記のような祭儀の場＝「間」としての役割を果たすと考えられる。そこに盆棚が飾り付けられて死者と生者の関係性をつなぐ「縁」を具象化させる。合津の盆儀礼は和室という「間」において盆棚や供え物が「縁」をつなぐ儀礼なのである。他地域においては家の外で祖霊を祭る地域もあるが、盆棚のある場所がその時その瞬間において儀礼遂行の場

## 舛本：儀礼的行為と教育文化

＝特別な「間」となると考えられる。

さらに、高階は、磯崎の発言を受けて、「そこに神様が来るしお祭りもする。それこそパフォーマンスされるという特別な場所がある」のであり、さらに「建築は時空間だというのは、そこに生活もあるし、特別のお祭りもあるからなの」だと述べている<sup>30</sup>。ここで興味深いのは、「間」が時空間を意味するということが如実に現れていることである。盆儀礼において祖霊を招き入れる和室は、盆期間においては盆儀礼遂行＝パフォーマンスのための特別な舞台、「間」となる。しかし、その「間」は、普段は日常生活を送る場でもある。すなわち、盆儀礼が行われる和室＝「間」は日常生活の時間の流れの中の「間」であり、盆期間が終われば日常の時間の流れを取り戻す。その特別な期間は時間の流れにおいては一時のことでしかない。しかし高階が「あるTPOのもとで、ある時間の中で、ある機会に、ある場所が結びついている〔中略〕パフォーマンスの場です。「間」というものはそういうことだと思うんです」<sup>31</sup>と述べるように、一時の時間の中で、盆の機会に、和室という空間において盆棚を飾り付けてもてなし供養するという儀礼的な行為の流れと対応して見えてくる。

以上のように、これまでのベルク、磯崎、高階の「間」に対する考え方は、墓から祖霊を連れ帰り、また赤飯によって盆期間の終了を知らせて縁側から墓へ、そして死者の世界へと祖霊を送り出すという流れの中にある、墓と家の配置を含めた「間」という地域レベルでの広い視野を与えるものである。

第1章において述べたように、合津の盆は13日に先祖を迎え、15日に先祖を送る。その両日とも提灯を持った同じ地区の人たちとすれ違う。普段は持ち歩かない提灯も、この日ばかりは誰も不思議に思わない。それは、この地域の人たちにとって当たり前盆期間の光景であり、それが盆儀礼の遂行を意味していると誰もがわかっているのである。

B家の盆儀礼において、ひ孫のKが13日に墓から家へ戻る道筋で、すれ違う人に対して元気に「こんにちは」と声をかける。相手も提灯を持って歩く姿で地域の人間だと分かり、知り合いでない人に突然声をかけられても安心して「縁」を結ぶことができる。また、この時他家の盆儀礼が地域の盆儀礼として自分の家の盆儀礼の記憶に重ねられている。こうした盆儀礼の遂行過程で他家の人間に出会う光景はよくみられ、「あら、こんにちは」と同じ時間に墓参りに出向く知り合い同士で声を掛け合う様子がみられる。こうして迎えの日は墓参りに行き祖霊を連れて帰るといった時間の流れが一定時間続くことになる。各家族の盆儀礼が同じ地域の他家の儀礼と時間的空間的に重なり、地域の儀礼遂行の「間」がそこに現れる。それは、一定の期間他家と同じ儀礼を遂行する空間が他の地域との境界線を生むことでもある。このように家と墓の間で盆儀礼が遂行されることで、生者と死者が一年に一度の「縁」を結ぶとともに生者と生者の「縁」が取り持たれ、地域という「間」が生じるのである。そして、この「間」において儀礼的行為を遂行し振る舞いを覚えるなかで、地域の一員としての自覚が芽生え盆儀礼は次世代へとつながれていく。このようにして「間」という概念を通じて垣間見ることができる儀礼的行為の中の教育文化は、目的―手段関係に解消される学校教育的な在り方とは別様の人間形成の視座を私たちに与えてくれるだろう。

<sup>1</sup> 鈴木晶子は、「教育」と「文化」を「教育文化」として一体として捉えることにより、「教

育の場における関係性の成立過程やその成立に働くひとの思いや期待、感情、身体といった、これまで「教育」や「文化」の範疇に入らないと考えられてきたようなものを扱おうとする立場から、「人間の生成・変容の様態を、広く、人間が活動するあらゆる領域のなかに見出してこうとしている」(鈴木晶子『教育文化論特論』放送大学教育振興会、2011年、215-216頁)。本稿における「教育文化」は、この鈴木らの定義に従うこととする。

<sup>2</sup> 例えば、高谷重夫『盆行事の民俗学的研究』岩田書院、1995年参照。

<sup>3</sup> 鈴木晶子・クリストフ・ヴルフ編『幸福の人類学』ナカニシヤ出版、2013年、iii-iv頁。

<sup>4</sup> Wulf, Ch., "Ritual", Wulf, Ch. (Hrsg.), *Vom Menschen. Handbuch Historische Anthropologie*, Weinheim und Basel, Beltz Verlag, 1997, S.1034.

[https://www.pedocs.de/volltexte/2015/1665/pdf/Vom\\_Menschen\\_Handbuch\\_Wulf\\_Christoph\\_D\\_A.pdf](https://www.pedocs.de/volltexte/2015/1665/pdf/Vom_Menschen_Handbuch_Wulf_Christoph_D_A.pdf) (2018年12月28日閲覧)(クリストフ・ヴルフ編、藤川信夫監訳『歴史的人間学事典』第3巻、勉誠出版、2008年、344-355頁参照)。前掲、鈴木『教育文化論特論』参照。

<sup>5</sup> 前掲、鈴木・ヴルフ編『幸福の人類学』。

<sup>6</sup> 岡部美香・高橋舞・韓炫精「「食」の技法とその継承に関する日韓比較研究(1)―葬儀における「食」の技法を手がかりに―」『京都教育大学教育実践研究紀要』第13号、2013年。

<sup>7</sup> 高松みどり「ゴッフマンのドラマトウルギーから見たチャレのパフォーマンスドキュメンタリー方法によるビデオ分析―」『교육사상연구』제28권 제1호、한국교육사상연구회、2014年。

<sup>8</sup> 宮田登『宮田登 日本を語る5 暮らしと年中行事』吉川弘文館、2006年、60-77頁。

<sup>9</sup> 高谷重夫『盆行事の民俗学的研究』岩田書院、1995年、269-278頁。

<sup>10</sup> 新谷尚紀「盆」新谷尚紀他編『暮らしの中の民俗学2』吉川弘文館、2003年、63-96頁。

<sup>11</sup> 松島町史編纂委員会『松島町史』松島町、1987年、160,180,232-234,243-245頁。

<sup>12</sup> B家の盆儀礼調査の詳細は、舛本佳菜江「儀礼による生の学び―熊本県上天草市松島町の歴史と文化から」『関西教育学年報』第38号、2014年、11-15頁を参照。継承という観点から模倣と創造的模倣を重点的に取り扱い、子が親を見て学び、親はその親や過去の自分の行為から学ぶ姿が明らかにされている。

<sup>13</sup> 前掲、松島町史編纂委員会『松島町史』1215頁。

<sup>14</sup> 同上書、1216頁。

<sup>15</sup> 同上書、1219-1220頁。

<sup>16</sup> オギュスタン・ベルク、宮原信訳『空間の日本文化』筑摩書房、1985年、58頁。

<sup>17</sup> 同上書、66-67頁。

<sup>18</sup> 東孝光『日本人の建築空間』彰国社、1981年、62頁。

<sup>19</sup> 磯崎新『見立ての手法』鹿島出版会、1990年、15,17,181-183頁。

<sup>20</sup> 前掲、ベルク『空間の日本文化』69頁。

<sup>21</sup> 板橋春夫「葬儀と食物―赤飯から饅頭へ―」国立歴史民俗博物館編『葬儀と墓の現在―民俗の変容―』吉川弘文館、2002年。

<sup>22</sup> 前掲、松島町史編纂委員会『松島町史』1218頁。

<sup>23</sup> 前掲、板橋「葬儀と食物―赤飯から饅頭へ―」189頁。

<sup>24</sup> 同上論文、187頁。

<sup>25</sup> 盛永俊太郎「赤米」盛永俊太郎編『稲の日本史 上』、筑摩書房、1969年、117頁。

<sup>26</sup> 前掲、板橋「葬儀と食物―赤飯から饅頭へ―」169頁。

<sup>27</sup> Macho, Th., "Tod", Wulf, Ch. (Hrsg.), *Vom Menschen. Handbuch Historische Anthropologie*, Weinheim und Basel, Beltz Verlag, 1997, S.951.

[https://www.pedocs.de/volltexte/2015/1665/pdf/Vom\\_Menschen\\_Handbuch\\_Wulf\\_Christoph\\_D\\_A.pdf](https://www.pedocs.de/volltexte/2015/1665/pdf/Vom_Menschen_Handbuch_Wulf_Christoph_D_A.pdf) (2018年12月28日閲覧)(前掲ヴルフ編『歴史的人間学事典』第3巻、228頁参照)。

<sup>28</sup> 前掲、ベルク『空間の日本文化』68頁。

<sup>29</sup> 磯崎新・河竹登志夫・高階秀爾・橋本典子「「間」―関係性を創出するエネルギーの場」『日本の美を語る』青土社、2004年、287-320頁。

<sup>30</sup> 同上論文、302頁。

<sup>31</sup> 同上論文、303頁。

(教育学講座 博士後期課程3回生)

(受稿2018年8月31日、改稿2018年11月22日、受理2018年12月21日)

## 儀礼的行為と教育文化

—熊本県上天草市松島町の盆儀礼における「間」に着目して—

舛本 佳菜江

本研究は、歴史人類学的な手法を用いて、儀礼的行為と教育文化との関係を明らかにする。2013年と2014年の熊本県上天草市松島町における盆儀礼の調査を行った。その調査結果をもとに、盆儀礼における「間」という概念についての考察を行った。盆儀礼においては、墓、赤飯、縁側が、死者と生者との「間」を演出する。こうした「間」において人々が盆儀礼を遂行することによって、生者と死者あるいは生者と生者の間に一年に一度の「縁」が結ばれ、先行世代から次世代へと継承される地域という「間」が生じるのである。

### **The Ritual Performance and the Culture of Education : Focusing on the *Ma* in the *Bon* Ritual in Matsushima Town, Kami-Amakusa City, Kumamoto Prefecture**

MASUMOTO Kanae

This article considers the relations between ritual performance and the culture of education, with regard to the *bon* ritual in Matsushima Town, Kami-Amakusa City, Kumamoto Prefecture. The results are used to consider the concept of *ma* (between) in Japanese. In the *bon* ritual, *burial*, *sekihan* (festive red rice), and *engawa* (veranda-like porch) produce the *ma* between the dead and the living. In the *ma*, people perform the ritual, so that the dead and the living, or the living and the living can form an annual *en* (connection), and the *ma* as the region appears inherited from the ancestors to the coming generation.

**キーワード**： 儀礼的行為、演技的行為、間

**Keywords**: The Ritual Performance, The Acting Performance, *Ma*